撮影◉星野健一（Office ANDANTE）

FINAL BATTLE

［全国選手権新潟県大会 開幕特集］

高校サッカー 秋の陣

ボールを追った3年間。
ずっと、忘れなかった挑戦し続ける気持ち。
重圧や挫折に打ち勝って手に入れたのは、
さらなる凛々しい自分。
超えた彼らにはどんな景色が見えているだろうか。

――スタンダード新潟編集部

注目選手1

［3年］

冷静でアグレッシブなチームの主軸

桑原航太

Kuwahara Kota

DF

高校生とは思えない落ち着いた振る舞いで味方を鼓舞するチームの心臓。基礎技術が高く、最終ライン、アンカーの位置から長短のパスを広範囲に散らしてビルドアップの起点となる。危機察知能力、ボール奪取能力も抜群。味方が高い位置でボールを奪われた瞬間にできたスペースを素早くカバーするなど、いかなる状況でも正しいポジションを取り、守備を安定させる。前回の全国選手権、初戦となった神村学園との2回戦では世代屈指のストライカー、福田師王を徹底マークし、自由にさせなかった。「相手の懐に飛び込む感覚やタイミングは独特。クレバーな選手」と古沢徹監督は高評価する。運動量を生かした攻撃参加も魅力の1つだ。

帝京長岡には中学3年時に練習参加し、入学を決めた。「選手としても人間としても成長させてもらった。ここでつまずくわけにはいかない」。県大会5連覇。そして、その先にある新潟県勢初の日本一へ向け、闘志あふれるプレーでチームを支える。

DATA
171cm　60kg
前登録チーム／
東京ヴェルディU15

撮影◉星野健一
(Office ANDANTE)

注目選手2

［2年］

ブレーク必至の超攻撃的サイドバック

内山開翔

Uchiyama Kaito

DF

DATA
170cm　64kg
前登録チーム／長岡JYFC

帝京長岡が送り出す今冬のブレーク候補。豊富な運動量とスピードを武器に左サイドを駆け上がり、高精度のクロスを味方に合わせる。1対1の守備でも体の強さを生かして跳ね返す。長岡JYFC時代はJFAエリートプログラムU-13でスペイン遠征、同U-14では韓国遠征に参加。中学2年時の2019年にはプリンスリーグ北信越を戦う上部組織的存在の帝京長岡に帯同するなど、早くから期待されてきた。高校入学後は右足のケガもあり、年代別日本代表招集からは遠ざかるが、古沢徹監督は「代表復帰に懸ける思いは強いし練習から目の色が違う。飛躍の年になる」と目を細める。全国総体の1回戦、佐賀東戦では1得点を挙げた。「まだ、ではなくもう2年。あと1年残っているとは思わない」。スピード感あふれるプレーでDFラインを鋭利に切り裂く超攻撃的サイドバックが、チームを全国へ導く。

撮影◉星野健一
(Office ANDANTE)

Crazy for BASEBALL
❶夏の高校野球ー新潟大会ー

エースのマウンドで交わした293球のエール

7月28日の全国高校野球選手権新潟大会決勝。日本文理が帝京長岡に延長11回、2-1でサヨナラ勝ちし3大会連続12度目の甲子園出場を決めた。日本文理3年田中晴也、151球。帝京長岡3年茨木秀俊、142球。プロ注目の2人の本格派右腕は、気持ちをぶつけ合い、全力勝負を楽しんだ。

撮影◉嶋田健一（スタジオ嶋田）
文◉佐藤一朗（編集部）

右手人差し指からの出血を太ももで拭いながら力投する田中

決勝
日本文理 2-1 帝京長岡

2022年7月28日（水）HARD OFFエコスタジアム新潟

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
帝京長岡	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
日本文理	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1x	2

〔帝〕茨木ー竹部
〔日〕田中ー竹野

試合終了後のあいさつ。ホームベースを挟み、茨木と田中は向かい合った。一礼し、お互いに自然と歩み寄る。「ありがとう」。同じ表現でたたえ合った後、茨木は田中に伝えた。「頑張れよ」。この時、2人は初めて言葉を交わした。

その少し前、茨木は右中間に飛んだ打球の方向を見ながらマウンドに立ち尽くしていた。「終わってしまったな」。日本文理ナインの歓喜を背中越しに感じると涙があふれてきた。1－1の11回裏2死一、三塁。日本文理の5番打者、玉木聖大（3年）に初球のスライダーを運ばれた。それまで4打数無安打3三振に抑えていた。変化球に合っていない、入りだけは大切に。そう意識して投げたコースは外寄りの低め。玉木のバットが届く位置に球がいった。10回2

鬼気迫る投球を見せた茨木。内容では田中と互角だった

令和4年度 東北電力にいがた杯
新潟県U12バスケットボール大会
7/23・24 柏崎市総合体育館
U12 NIIGATA BASKETBALL TOURNAMENT

必勝レイアップ! 女子は矢代田と浜浦、男子は片貝が優勝

各地区予選を勝ち抜いた男女それぞれ16チームが激突。熱戦を展開し、女子は共に新潟地区の矢代田ウィングスと浜浦ウィンドガールズの同時優勝（決勝行わず）、男子は中越地区の片貝スーパーボーイズが栄冠をつかんだ。

撮影◉**星野健一**（Office ANDANTE）、**伊平裕哉**（スタジオ嶋田）、**井上和男**（編集部）
文◉**井上和男**（編集部）

男子決勝

片貝スーパーボーイズ 53 [22 - 8 / 6 - 18 / 8 - 10 / 17 - 12] 48 **塩沢ミニバスクラブ**

ドライブを仕掛ける塩沢の星野

片貝スーパーボーイズと塩沢ミニバスクラブの男子決勝は、白熱したシーソーゲームとなった。第1Qは160センチ台の長身選手をそろえてゴール下で優る片貝が22－8とリードを奪う。第2Qに入るとリズムの出てきた塩沢が反撃開始。星野連斗（6年）を中心にスピーディーなバスケで2点差まで詰め寄り、続く第3Qには一時逆転した。

同点で迎えた最終Qは一進一退の攻防戦。しかし終盤、疲れの出た塩沢に対し、片貝はシュートを確実に決めて守り抜き、粘る相手を突き放した。

「（2Qで）いっぱい失敗してやられちゃったんで、ディフェンスを頑張ればいけるんだと盛り上げました。（勝利の要因は）みんなでディフェンスを頑張って守り抜いた結果です」（内山蒼介キャプテン・6年）

両チームは中越地区同士で過去に何度も対戦。今年は片貝が2勝しており、3回目の対戦となった今大会も片貝が勝利した。

女子決勝は、浜浦ウィンドガールズが対戦できなくなったため、大会規定により矢代田ウィングスとの同時優勝となった。矢代田は新潟地区予選4位で、この大会は初出場。2回戦で強豪の葛塚ウイングスを接戦の末に破り、勢いに乗って決勝まで上り詰めた。「こちらはチャレンジャー。練習の時から笑顔でプレーしようと言ってきました」と斎藤晴也ヘッドコーチ。キャプテンの中山咲菜（6年）も満面の笑顔だ。

「初めての県大会。すごくうれしい。みんなで力を振り絞って勝てて本当に良かったです。このチームでずっとチャレンジしてきた。それがこの優勝につながった。（葛塚は）勝ちたいとずっと思っていた相手。初めて勝てました」

3位決定戦は、男子は新発田キッズがBAD BOY,Sに41－36、女子はB－FAN,Sが赤塚スワンズに48－42で勝利した。

無観客、消毒の徹底をしても出場を辞退するチームが出るなど、コロナ禍により関係者は厳しい大会運営を強いられたが、試合をする喜びにあふれた子どもたちの笑顔は何にも代え難い成果だった。

女子準決勝❶

矢代田ウィングス 47-38 **赤塚スワンズ**

中山キャプテンが優勝カップを持ち、笑顔の矢代田メンバー。「優勝はこれまでの練習の積み重ねです」（中山）

女子準決勝❷

浜浦ウィンドガールズ 45-38 **B-FAN'S**

堅実なディフェンスで勝ち上がった浜浦。決勝は戦えなかったが、名門チームらしく高い技術が光った

男子決勝、片貝の堀井斗哉がレイアップシュートを決める